

# 学びのコミュニティ ⑩

平成 29 年 3 月 11 日（土）

14：00～17：00

松山市青少年センター

3F 大会議室

## 1 問題提起講演

ふるさとの学びで子どもたちがどう変わるか

前松山市教育委員長 金本房夫氏



今年で 74 歳となる。4 分の 3 世紀を生きた。今まで実践してきたことを話す。

教師生活 38 年、そのうち、中島で 20 年ほど教師をした。島の学校、へき地であるが、愛媛も東京に比べるとへき地である。どこを歩いてもシルバーランド化している、日本全国大半のところは人口が減っている。かつて、地方の時代といわれていたことがあった。そのときは、本当に来るのではないかと思っていたが、なかなか来なかった。過疎や少子化は教育そのものの課題ではなく政治的課題である。教師が子どもに対して、自信をもってふるさとのことを語れるか。自分のふるさに自信が持てない。島は未来がないと仮定でしゃべっている。島で住んでいてもいいことがない、ふるさにロマンが抱けない。心の過疎、へき地化と呼んでいる。

教育が取り組むことは、心の過疎のこと。児童が胸張ってふるさを語れるように、教師が取り組まなくてはいけない。悩んで、苦しんで、島に留まることを決める生徒は少ない。私も島に残る教育をするべきなのか、あるいはふるさから雄飛する教育をするべきなのか悩んだ時期がある。

学習指導要領に遵守して、しっかり学ばしていくのが教師。どこに住もうとも、ふるさとで受けた教育がバネになるようにはなくてはならない。

中島の子どもたちは、義務教育が終わると中島から巣立っていく。中学校の卒業式は、ふるさからの卒業式だからみんな泣いてしまう。なんとか、ふるさを育てていきたかった。昭和 40 年に教師になって、以来、へき地性を克服する教育をしてきた。へき地教育上の諸問題があるが、へき地教育に問題点があるのなら、大規模校にも問題点があるのではと思っている。「へき地に光を」ではなく、「へき地から光を」を実践していきたい、よさを精一杯生かすことによって変わってくると考えていたが、結論をいうと失敗した。今、中島の人口は、4000 人強。寂しい。

地域素材の実践化として、素材の教材化をした。「ふるさと中島」「中島の歴史物語」「中島のわらべ

歌「中島のむかし話」等をつくった。ふるさとへのほごり。知ることから愛が始まる。教材化することによって、子どもたちの目をふるさとに向けることができる。

不自然なことがいっぱいある。生活している論理を社会科の教科への論理へ。公民で産業構造の高度化の勉強をする。特色として、経済の2重制、第1次産業2次産業、3次産業と分かれる。第1次産業の人口が減って、2、3へとシフトしていった。2、3は所得がいい。GNPが伸びていきますよと。中島は1次産業。日本全体では10%。現在は、歯医者さんの国家試験に通る人のほうがはるかに多い。高校出て、農業を継ぐより希望が持てるか。物価の安定を図るには、安い農産物を輸入したらいいと書いてある。島で農業を営む家の子どもたちにどう教えたらいいか。ジレンマの中でやってきた。事実は事実として教えるが、その中で、ふるさとに誇りをもつ子どもを育てなくてはいけない。

地域人材の活用もしていく必要がある。地域にいる優れた先人。教師だけが中心になって学校で教える時代は終わった。先進的な農業「のあ」について、アメリカで農業技術を学んだ人を呼び、話をしていたり、2.26事件に関与した人の話を聞いたりした。津和地は来年2人の卒業生を出せば、休校となる。しかし、「のあ」は存続する。

子どもの「少年の主張」発表会には、親子で弁論大会をする。子どもは各学年男女1名ずつ、父親・母親の代表は、PTAで選んでいただく。親は自分の生き方を語ってくれる。中島中学のPTAは全国一である。親と先生が共に学ぶ。

以前、愛媛県生涯学習課で、島をでるか、残るか、2つに分かれてディベートをした。一度出してまともな人にしなければならぬという考えが大半を占める中、ばあちゃんと2人で生活している子が、「本人の心の持ちようだ」と言った。みんな、拍手である。

校長の時、参観日の在り方を変えた。部活を見てもらうことにした。成績の悪い子が、部活でがんばっている。参観日に行ったらよかったと思える演出を教師がする。授業では見られない子どもの姿を見る。ブラスバンドの演奏、野球部の子どもたちが奏功する。形としてみせる。人権同和教育の参観日の時、親も参加してくださいとお願いした。教師には親が手をあげたら真っ先に指名してくださいと言った。変わったのは先生で、地域・保護者への理解が深まった。地域の人も啓発されるような参観日も考えたらいい。

地域のために汗をかいて日常的にボランティア活動をする。汗をかいて、役立っているという実感をもってもらうことを目指した。老人ホームに訪問して、生徒が車いすの錆を落として、ぴかぴかに磨き上げた。春には、老人をつれて散歩したり、盆踊り大会を催したりした。姫が浜の海岸清掃は授業日にやっていた。それがボランティアか、ボランティアとは土日にするもの。清掃した後に台風が来て、子どもに見せた。子どもに「これでいいんか」と聞いた。生徒会にボランティアを呼びかけた。海開きが始まる時や、中島のトライアスロン大会が始まる前に清掃活動をすることにした。役立つボランティア。当日も参加する。

ふるさと、中島賛歌をつくった。混声3部合唱で1番は瀬戸内海、2番は忽那諸島、3番はミカン。校歌に準ずる曲として。

また、教師のための俳句入門の本をつくった。豊かなる海や山、豊かな自然とは何なのか。俳句集会がいいと思って企画した。15年間継続している。

青潮寮の有効活用については、入学してきた1年生を1か月寮に入れる。週末は家に帰すことにした。家での躰ができていないことを知って、人生の基礎・基本を学ばせた。洗濯機の使い方、風呂の入り方な

ども。1か月徹底させると子どもは変わる。確立すると、学力は必ず伸びる。公民館活動を起点として、社会性を教えていく。3年生は1日14時間くらい勉強させた。中学校時代、こんなにも勉強したんだということが、生きることのバネになる。最後の日は、バーベキュー大会をする。教育は、束縛と解放。束縛があるから、解放の喜びがある。

学社融合として、ふるさとを1教室と見立て、美しき人、坂本冬美を招いた。坂本冬美と一緒に踊る園児。このようなコンサートはなかなかない。

中島の11時からの時報も坂本冬美が歌っている。どうやって、坂本冬美を口説いたか。当時、坂本冬美はスランプで歌手を休業していた。歌手としてやっていけるかどうか悩んでいた。中島であなたの歌を待っている人がいると口説き、それではということでやってきてくださった。NHKが番組にしてくれた。2回目は島博のときにノーギャラで。もう一度呼ぼうと思ったが、呼ぶ根拠がなかった。それで、坂本冬美の歌碑建立することにした。来てくれるには、なにかつらいといけない。イベントをイベントで終わらせる花火のようなものではだめ。80を過ぎたおばあちゃんは、2メートルの巻物でお礼の手紙を書いた。若い人は演歌が好きではない。しかし道徳の時間に先生が取り上げてくれた。老若男女すべての島民が喜んだので、来てよかったかな、参加してよかったと思ってくれたようである。集合写真もとって送った。坂本さんは、こんなにも大切にしてくれている町があるだろうか。ありがとうと言ってくださった。

お礼状など、心の教育が必要。公民館館長も3年した。こちらから出掛けて、人権同和教育をした。交流会も開催した。公民館活動は、あきらめの定住民を減らしたい、選択的定住民を増やしたいの思だった。

事業を大事にしてきた。地道な学校文化・地域の中で子どもが育つ。ふるさとから実践してきたが、過疎化はすすむ。残念である。附属中は地域の成人式を終えた後、小講堂に集まる。集まる思い出があるからだと思う。新井満は言う。感動とはなつかしさだと。それに人は感動する。その時その時の、心のふるさとという教育を推進していく。地域が減びると日本が減びる。グローバリズムが日本をだめにする。豊かな時代は過去のものとなった。日本の美しい響き、地域の良さを大事にしていく。ふるさとは地域の文化を大事にすること。倉本聰の昭和からの遺言。情・情け・人と人とのつながりが深い。ふるさとを知り、そのために汗をかく。じいちゃん、ばあちゃんと一緒に……。中島の子どもたちは、教師になる数が多い。8人の校長が誕生した。同窓会では、島に残っている連中が世話をする。伝統的な行事が続くことが1つの成果だと思う。



## 2 マインドから変える地方創生

愛媛大学附属元高校3年 佐藤 瞳さん



内閣府が主催する、地方創生政策アイデアコンテスト優秀賞をいただいた。

ご当地アイドルやキャラクターなど、小さい時より愛媛の良さをたくさん教えてもらった。また、愛媛は言葉に囲まれた町、どうにかアピールできないかと、コンテストに応募した。

内閣官房提供の地域経済システムを用いて、地域への誇りや愛着（シビックプライド）が高いほど、転出数が少なく観光客が多い傾向があることが分かった。第1位は京都、愛媛は20位だった。シビックプライドが高ければ、転入数が多く、転出数が少ないのであれば、地方創生に有効ではないのかと考えた。シビックプライドをどう高めればいいのか、小学生から意識させる教育が必要ではないかと。

そこで、地方間交流フィールドワークの可能性を模索した。聞き取り調査の結果、山口県は、コミュニティ・スクールの普及率が99%と伺った。山口は幕末維新期に寺小屋普及率が全国2位であり、昔から学校を応援する風土があったようだ。また、自己肯定感が高まることによって、不登校児が減ったという実態は掴めていないが、東京都三鷹市はコミュニティ・スクールを立ち上げて、不登校児が減少したという例もある。

他県の人から褒められる、地域産業の宣伝の場としてもコミュニティ・スクールは有効ではないのか。愛媛のコミュニティ・スクール普及率は1.2%。愛媛でこの事業に取り組んでいる鬼北町の日吉小学校へ行ってきた。コミュニティ・スクールは話し合いの場。学校運営協議会の会議の様子は、毎回メディアが参入して、ビデオテレビで誰でもみえる。

このたび、表彰を受けたことで、市長室を訪問した。愛媛全部の学校にコミュニティ・スクールを導入してくださいとお願いした。

シビックプライドをもっていないけれど、地域の活性化はできるか。今回の調査結果ではそれは、できない。

今年度、東京の大学へいくことになったが、今後は地方創生×教育×メディアの研究をして行きたいと思っている。愛媛の良さを外からみて、学んでいきたい。



### 3 地域の学びが未来をつくる

金本 房夫氏と愛媛大学教授 平松義樹氏による対談



**平松：**今日は勉強会のために、みなさんにリアリティを感じていただこうと思います。ビデオ・写真を使わせていただきますがご容赦ください。先ほどの佐藤さんの発表を聞いて、「地域のほこり」や「シビックプライド」は小さいころから熟成することが大切という話に心が響いたのですが、金本先生、感想をお聞かせください。

**金本：**プライドを持たば地域に定着するかというとなかなか難しい。島はいいところと赴任してきた教師はみんな言う。しかし、そんなに長くはいたくないと。村落共同体といういいところは、決して住んでみたいところとはならない。島のお母さんからは病院があって、交通の便が良く、安定した所得があるところに住みたいと言われる。みかん農業が盛んだが、収入が不安定。いいところイコール住んでみたいところとはならない。嘆きがある。ふるさとへの愛、ほこりが自分の足元にはじまらない。

**平松：**ヒラリーという学者は、94 通りのコミュニティの定義があるという。しかし、コミュニティ、地域性の問題は地域によって違う。松山市を中心とした市街地、久万高原町の山間部、中島町の離島など、どれをとってしてもそれぞれ違う。婦人会や敬老会においてもその活動に地域格差がみられる。東京渋谷の交差点を歩く人口と中島町大浦の廃屋、過疎限界集落、この地域性格差をどう考えるか。

金本先生は、『へき地に吹く風』で、へき地は僻地ではなく、紺碧の碧地だと述べておられます。へき地の良さを生かして子どもを伸ばしていきたい、それが「ふるさと教育」につながると言われています。若かりし頃のこのビデオをご覧ください。

ビデオ上映（島の教師として金本 42 歳ころのもの）

金本先生、ビデオの感想と地域性についてどのように考えられますか。

**金本：**地域の格差、いろいろある。現実には、久万高原町は過疎が進み、中島も同じ。ずっと島に生まれ育ち教師をしようとして教師になった。ずっと島にいたが、ある日、松山の勝山中学校へ赴任することになった。島の子どもは素直で豊かな子が多い。しかし、勝山中学校の子の方が、ストレートに自分を表現できる。素直さとか、純粹さが山や島にしか残されていないという仮定は打ち砕かれた。都市部の地域性、都市部でしかできない「ふるさと教育」もあるのではないか。先生が、赴任して行って、その地域にどう「惚れ込む」か。惚れ込まないと見えてこない。実状に応じたふるさと教育でないといけない。

**平松：**地域性があるコミュニティ、地域性がないコミュニティ、コミュニティを感じさせないバーチャルな空間。

コミュニティの多様化が進んでいる。生産と生活、農村と都市。かつては、共生の姿勢。大人の働いている姿を見て、子どもは育っていった。産業の高度化により、農村共同体から都市部への人口移動。そこで核家族と「カイシャ」を誕生させた。戦後の経済発展は、個人を孤立化させ生きづらい世界を創出した。成熟社会の今、どう生きるかが問われている。かつては、冠婚葬祭は家でやっていた。私も、小学校 2 年生のときに牛 2 頭の世話をするのが家族の一員としての役割であった。大家族で桜の季節にはたくさんの親戚が集まり交流した。今は違う。一人で農作業をしなくてはならない。産業化は着陸の時代を迎えており地域の意味が問われている。「かくあるべき理念」と「ともに生きる共生の思想」についてどう思うか。お教えてください。

**金本：** 共生の思想を断ち切った時代である。共に生きる時代を構築しなくてはいけない。貧しい時代は、助け合うことが生きる知恵だった。道德のモラルということではなかった。豊かな社会、今の社会はお金があれば生きていける。家族、大家族はいない。今は、2 人あるいは 1 人の核家族化。親孝行したくないのに親がいる状態。年取ったら、老人ホームに入りなさいということである。どうするか。学校で地域を巻き込んだ形で一体となって、心が通じ合う、学校文化というものをどう構築していくか。かつては、学校教育が特化していたが、今は、枠を超えて、コーディネートし、ともに生きることを考えていく必要がある。体験をさせることで経験となる。かつて、学校から老人ホームへ月 10 回ほど子どもを連れて行っていた。こんなエピソードもある。上半身の動かないおじいちゃんに子どもがマスコットをあげた。他の人がそのマスコットに触れようとしたとき、奇跡的に上半身が動いた。他の人に触れさせたくない思いがそうさせたようだ。子どもと地域との関係の中で、心と心がつながる、経験をさせる学校が核となった。地域のほこりをもってつながるという方法しかない。社会からも学ぶ。

**平松：** 学校が核となるとは、具体的にどういうことでしょうか。

**金本：** 中島には公民館、老人クラブもある、目的は地域に奉仕するクラブ。何かがないとできないものは衰退する。仕掛けをするといい。文化祭は、3,400 人集まる。文化センターで空席がない。小学生、中学生がオープニングセレモニーをする。子どもが参加するから、大人が来る。子どもを中心にすると推進しやすい。

**平松：** 連携する相手は。自治体、NPO、PTA？どこなのでしょう。

**金本：** PTA ではないだろうか。自分の子どもが通っているので協力してくれる。松山市の場合は、まちづくり協議会でもつくと上手いかもしれない。心の育成は、PTA と公民館ではないか。

**平松：** 昨年、生涯学習課が行った実態調査結果から、伺いたい。地域への愛着に否定で地域の活動に 30%の子ども達が好きではない実態がある。地域の活動に興味がない、参加しない子どもが多い。保護者も、10 人に 3 人が地域行事に参加しない。防災に関しては 10 人に 6 人。先ほど、話をしてくれた佐藤さんはどうでしたか。

**佐藤：** 地域のお祭り等、地域の学校に通わなかったので参加していない。地域に友だちができたので、少しずつ参加しようと思っている。

**平松：** 行事に参加したくない気持ちは？

**佐藤：** 全く参加していなかったら、一人で参加するのは不可能だと思う。私は、友だちができたので、参加できた。

**平松**：ビデオ上映「地域のおせっかいおばさん」(東京豊島区)

このような人が地域から消えてしまっている。松山秋祭りのときに神輿音頭をかけるなど大声で怒鳴る人もいるのが現実。このことについてどう思われますか。

**金本**：子どもが嫌がっても、半強制的にさせる。オルコットの動機の機能的自立。いやいやながらもやったことが、そのうちに面白くなる。そして進んでやるように。子どもたちが嫌がるからさせないのではなく、いやなこともさせていく。強制に参加させられたが、行ってみると面白かった。そのような教育を問われている。やっこ振りという祭りがある。松山へ出た者も秋祭りには帰ってくる。盆踊りもある。中学生も、最初は強制的だったが、毎年やっているとして義務付けになってくる。トライアスロンの掃除も当たり前になる。

**西村**：コミュニティ・スクール実践を通しての感想。文科省は、開かれた学校づくりによる、信頼された学校づくり。学校を地域・家庭に開く、地域の人との協力で、教育の質の向上を図る。コミュニティ・スクールの外部教師の発掘等、かくあるべき理念がある。学校の理念は家庭地域に発信しない。地域はどんな理念があるのか、集約する場がない。コミュニティ・スクールでは校長としての理念を発信することができる。伝え合うことで、目標とかビジョンとかが共有できた。また、教育の質の向上に貢献できた。この事業を成功させるためには、中心的な役割を担う教職員を配置して、学校の内側からも変えていかなくてはならない。

コミュニティ・スクールはなぜすまないのか。

**金本**：コミュニティ・スクールの具現化をしてきた。PTA・地域と交流する中で実践してきた。やらんよりはやったほうがいい。同和の進化とおなじようなものと思う。コミュニティ・スクールという言葉とか、学校評議員とか、なんでつらんといかんのか。都会的発想である。進んでないところは利用してもいい。それぞれの実情に応じて、7 体系化、組織化して深まっていけばいい。学校で、子どもがどうか変わったかが重要。

**平松**：地域創生プランがうまくいくためには、人と人をつないでいく、積極的に推進していく人が必要であるという認識がある。

これまでの意見を聞いていて、どなたか意見はありませんか。

**仙波**：実態として、地域と学校の関係性は、例えば金本先生がおられるからできている処もある。地域住民は定住しているが、学校の教師は 2,3 年すると入れ替わる。片思いではなく、両想いとなって子どもを育てたい。学校の特性もあると思うがどうしたらいいか。

**金本**：辞めた時、妻に「先生らがほっとしとらい」といわれた。校長がかわって、学校の文化が変わるかというそうとも言えない。タネは継続しているものもたくさんある。職を退いても続いていくものもある。校長や公民館長がかわっても根付いていくものもあれば、新しい付加価値ができることもある。リーダーが元気なところは、地域が元気。かわらないものをつくるには、組織やシステムをつくらないといけない。機能できればそれにこしたことはない。言葉が先行したらどう機能しているか、考えたらいい。地道な努力の継続性みたいなもの。持続するためには、組織があったほうがいいのかも。

**平松**：地域も時代も変わってきている。大量退職時代は、65 歳以上の人たちが地域に戻ってくるという時代だ。この人たちを巻き込んで、学校を支えるようにする。そうすると、人材がたくさん増えてくるのではないか。

愛媛は愛着度ランキング 20 位、ふるさと自慢度 30 位。この会のために金本先生のふるさと中島を調

査した。古い文化財とともに、地域には廃屋も見られた。私が教員としてこの島に赴任したら何を教えたらいいのか考えさせられた。鬼北の日吉町、訪れても人っ子一人いない。しかし、祝日には日の丸が掲げている。地域について学び、地域から学ばせてもらう。そして、地域で学ぶことによって、地域のために地域とともに学び、地域の一員として、自覚や誇りをもつようにすることが大切である。

ビデオ上映 誇りと愛着。この写真は、金本先生の大学での授業風景。金本先生、このこぶしに込められた思いを語ってください。

**金本：**教育長をした中で、いいことを2つした。1つは、「ふるさと松山学」。子規の俳句を10句くらい言える子どもをつくりたいと、ふるさと松山を誇りに思えるような詩歌をつくり、新井満さんに作曲していただいた。また、松山の先人100の本をつくった。108の講話がまとめられている。今後増版し、地域の人に読んでいただきたいと考えている。ふるさとっていいなと、共に支え合う高齢化社会でいいと思う。

**平松：**「子どもの心の中にふるさとをつくる」しかけをたくさんしたいものだ。公と私の間、多元、多様、系列の用語で特徴づけられる。Create the community for children< Child care in community の精神で、三つの「きょうどう」協働、共同、協同意識を育てていきましょう。そのためのアクションを起こしましょう。

#### 総括

東日本大震災から、6年目。「夏草や、生き残るとは生きること」。高校生の佐藤さんの発表、すごいなと思う。高校生発希望としての子どもたち、いい言葉を聞かせていただいた。先ほど、産業化、高度成長。地方から上り列車に乗ってやってきた。おかしいと思いはじめたのがオイルショックのころ。過疎をさかてに生きていく。今いるところを中心として、考え方を変えていこうと。遠くのことより近くのこと、世界でたった一つの物語。地域探求から地域創造へ。地域学習の見直し。地域で育てて地域をつくっていく。

